



# 新たな価値を創造し、地域に活力を

多彩な人材の交流から、世界に「OMOSIROI」を発信

**野村 卓也** ●一般社団法人ナレッジキャピタル 総合プロデューサー  
**楠見 晴重** ●学長

大阪都心の一等地、大阪駅北地区「うめきた」に、2013年4月26日、グランフロント大阪がオープンした。その中核施設ナレッジキャピタルは、「感性と技術の融合により、新たな価値を創出する」をコンセプトに、最先端の技術や研究に触れることができ、連日幅広い層の来場者でにぎわっている。世界に向けて成果を発信し、大阪の活性化を推進する強力な拠点として期待されるこの施設の総合プロデューサー・野村卓也氏と楠見晴重学長が今後の展望を語った。



The Lab. では最先端技術を体験できる

## ◆どこにもなかった知的創造拠点

**楠見** ナレッジキャピタル開業は、たいへん大きな反響を呼びましたね。

**野村** おかげさまでグランフロント大阪全体に非常にたくさんの方にお越しいただいて、ナレッジキャピタルにも幅広い層の方が来られています。ナレッジキャピタルはビジネスマンや研究者が対象と思われがちですが、実際にはお子さんや若い女性、シニアのご夫婦の来場も多くなっています。

**楠見** このような施設は日本ではもちろん、世界を見渡しても例がないのでは？

**野村** おっしゃる通りです。主な施設として、企業や研究機関が集積した「ナレッジオフィス」、企業間のコラボレーションを目的とした「コラボオフィス」や、さまざまな分野を超えた出会いと交流が可能な「ナレッジサロン」があります。そこで立ち上がったプロジェクトに基づき、作成したプロトタイプは「The Lab. みんなで世界一研究所」で展示し、消費者の反応を知ることができます。さらに具体的なものが出来上がれば、発表・披露ができるシアターやコンベンションセンターもあります。つまり、さまざまな人材が集まり、出会いからアウトプットまでワンストップでできる。このような拠点は世界でも他にはないだろうと思います。それも、ターミナル駅前の一等地で、一般

の方々が気軽に立ち寄れる場所にあり、商業施設も混在しているような拠点は無いはずですよ。

**楠見** 前例のないプロジェクトだけに、総合プロデューサーとしてのご苦労もあったのではないですか？

**野村** 私が総合プロデューサーになった時には、「感性」と「技術」を融合し「新しい価値」を生み出す知的創造拠点」といっても、どのような施設でどのように運営していくのかまだ漠然としていました。そこから、ナレッジサロン、ナレッジシアター、The Lab. という3つの直営事業の企画をまとめ具体化する一方、ナレッジキャピタルを知っていただくイベントを定期的に開催することで、賛同者を増やし、参画者の募集も行いました。その中で一番の苦労といえば、コンセプトや意図をなかなか理解されなかったことです。世界にも類のない試みだけに、何かを例に挙げて「あそこみたいなものです」という説明の仕方ができない。ピンとくる人は「面白い」と言ってくれたのですが、分からない人にはいくら言葉で説明してもさっぱり伝わりませんでした。

## ◆大阪の元気は民の力で盛り上げる

**楠見** 大正から昭和にかけて大阪は「大大阪」と呼ばれて、商業や紡績、医薬品などの産業が栄え、東京を上回る活気に溢れた時代がありました。その黄金時代、大阪では官ではなく民が主役でした。それが徐々に東京一極集中が進み、大阪は元気がな



「The Lab.」で大学における知の創造の成果を展示すれば、専門家だけでなく、一般の方にも知っていただけることにつながります。

「ここからスターを生み出し、世界に『OMOSIROI』を発信していきなさい」と考えています。



ナレッジキャピタルに開設された「関西大学うめきたラボラトリー」

**野村 卓也 (のむら たくや)**  
1953年大阪府生まれ。76年関西大学文学部フランス文学科卒業。広告代理店勤務後、92年株式会社スーパーステーション設立。学生映像コンテスト[BACA-JA]、クリエイティブビジネスマッチング展示会「大阪創造取引所」などを企画・プロデュース。一般社団法人ナレッジキャピタルでは総合プロデューサーとして、コンセプト立案、施設企画、参画者募集計画などに開業前から携わる。株式会社スーパーステーション代表取締役社長。大手前大学メディア・芸術学部客員教授。関西経済同友会幹事、芸術・文化委員会委員など。

**楠見 晴重 (くすみ はるしげ)**  
1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国 Imperial College 留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。公益財団法人大学基準協会理事、一般社団法人日本私立大学連盟常務理事、国土交通省道路防災ドクター、土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古物語 京都一千年の水脈」など。

いと言われるようになりますが、大阪を元気にする核となるのは、やはり民だと思っています。大阪で生まれて大阪に育てられてきた本学も、民の力の1つとして貢献したいと願っていますし、ナレッジキャピタルにも大阪を元気にする核となって頑張ってもらいたいという期待を持っています。

**野村** 正にグランフロント大阪は民間主導のプロジェクトで、12社のデベロッパーが運営を行っています。その点も世界的に例が少ないといえます。オーストリアのリンツで毎年開催されている世界的なメディアアートの祭典を主催し、美術館や博物館機能を持つセンターやアトリエ、研究機能を持つフューチャラボを常設している「アルス・エレクトロニカ」の代表が先日来られましたが、彼が一番感心していたのもここが民間主導で運営されていることでした。

◆多様性が交錯する場から革新を

**楠見** 大学の役割を考える上で、重要なキーワードとして「知」があります。大学は知の継承、知の創造、知の循環を行っていかねばならない。その取り組みを社会に向けていかに発信していくかを考えたときに、幅広い分野の研究者やビジネスマン、一般の生活者が行き交うナレッジキャピタルは非常に面白い場所です。The Lab.で大学における知の創造の成果を展示すれば、専門家だけでなく、一般の方にも知っていただけることにつながり、これはとても楽しみなことです。

**野村** 展示ブースには展示内容を評価する「いいね!」ボタンのようなものを設置している企業もあるのですが、大阪の方はどんどん押していきます。これは、東京では考えられないことで、こんなに押されないようです。「悪い評価であっても、押しもらえることはうれしい」と研究者は話しています。そういう意味で、消費者の反応を見るには非常に良い場所のようです。企業の方も大きな期待を寄せられています。

**楠見** ナレッジサロンは会員制ですね。どんな方が入会されているのですか？

**野村** 現在、会員数は約900人。開業時はThe Lab.の出席企業

の関係者などが中心でしたが、最近は見学に来られて気に入って入会される若いクリエイターや起業家が増え、会員の幅が広がっています。7階のナレッジサロン中央の大きなカフェラウンジも、席がいっぱいになるほど活況を呈するようになっています。

また、若手のクリエイターやスタートアップのベンチャー企業が入っているコラボオフィスは、オープンスペースで横のつながりを深めながら、実際に何かを生み出す場所として機能し始めています。

**楠見** 本学では4月に、学生が集まり、討論し、共同で発表するものを制作できる「コラボレーションコモンズ」というオープンスペースを千里山キャンパスの凜風館に開設しました。学生版のナレッジサロンやコラボオフィスといえるかもしれません。もし機会があれば、のぞいてみてください。

**野村** 「場」は重要ですね。自然な交流を育むことができる場があり、多様なものの考え方や、異なる世界にいる人達と出会うことが、イノベーションにとっては効果的だと思っています。

◆関西大学うめきたラボラトリーを開設

**野村** 関西大学がナレッジキャピタルに参加していただいたことは、私も関西大学OBとしてうれしいですし、非常にありがたいと思っています。大阪大学もそうですが、大阪に昔からある大学がここで活動し、さらに企業と一緒に新しいものを作り出していくことが非常に重要だと感じています。ナレッジオフィスに入居いただいた「関西大学うめきたラボラトリー」はどのようにお使いいただいていますか？

**楠見** 今、利用しているのは化学生命工学部と総合情報学部です。化学生命工学部は、不凍タンパク質研究の第一人者である生命・生物工学科の河原秀久教授が、学生も交えて企業と商品開発の課題についての会議などで利用しています。不凍タンパク質を利用することで冷凍食品を解凍したときの味の劣化を防ぐことができるなど、さまざまな効果が期待されているため、いくつかの企業が河原先生の研究に関心をお持ちになり、すで

に実用化に至った事例もあります。

総合情報学部は田中成典教授の研究室と本学発のベンチャー企業・株式会社関西総合情報研究所が連携して「Androidアプリ開発短期セミナー」を開催しています。関西総合情報研究所には社員として働いている総合情報学部の学生もいて、このセミナーでも活躍しています。学生にとっては学んだことを学外で活かしていくことが良い刺激になっているようです。

ラボラトリーでの活動は6月に始まったばかりで、今後、さらに産学官連携による研究事業の活性化と社会還元のために有効に利用していきたいと考えています。

◆世界と連携、世界に情報発信

**楠見** 関西大学では私が学長に就任してから、世界の大学との結びつきを深めていこうと、ここ数年はとりわけアジアのハブ大学を目指し、連携を強化してきました。ナレッジキャピタルもここで生まれた成果を海外に広めていくなど、世界を視野に入れておられると思います。具体的に海外との連携の取り組みなどを教えてください。

**野村** グランフロント全体が、「アジアのゲートウェイ」を掲げています。ナレッジキャピタルでは、開業前からシンガポール、香港、台北、ソウルなどの都市と交流を深めていて、既に成果も実り始めています。

例えば、7月には「香港サイエンス&テクノロジーパーク」の代表が来られたのに続いて、「香港サイバーポート」の代表と入居企業5社が来られ、ナレッジキャピタルの参画者と一緒にセミナー、ディスカッションとビジネスマッチングを行いました。12月には希望者を募って、逆にこちらから香港を訪ね、プレゼンテーションをしようと計画しています。その後も交互に訪問し合い、年4回程度の交流を続けていこうと考えています。

また、フランスのリヨン市からも、市内にある駅前の再開発プランのために、市長一行が団体を視察に来られました。リヨンにはこちらからも数度訪問していて、将来的な連携を検討しています。SNS全盛の時代ですが、フェイストゥフェイスの交

流がやはり大事です。海外企業との連携を通じて、互いにマーケットを広げる道筋を作れたらと思っています。

**楠見** それはぜひ、どんどん進めていただきたい。ここが活力ある大阪の1つの象徴的な施設として世界から注目されるようになれば、ナレッジキャピタルがあるから大阪を訪れようという観光の新しい切り口が生まれると思います。

◆ナレッジキャピタルはスター誕生のステージ

**楠見** 大学には教育機関として社会に有為な人材を送り出していくという役割があります。そのために、本学では自ら考え、行動できる人材を育成する教育を進めています。新しい産業・技術・文化・価値を創造し、関西から世界に発信することを目指しているナレッジキャピタルとしても、人材育成は大きな課題なのではないですか？

**野村** そうですね。人材育成は大きなテーマとして取り組んでいます。その一環として、いくつかの公募のアワードを開催します。「インターナショナル・スチューデント・クリエイティブ・アワード (ISCA)」もその1つです。ISCAは、学生を対象にした映像コンテンツのコンテストで、国内と海外部門があり、国内にはモバイルアプリ部門もあります。海外は連携している香港やシンガポールを中心に応募を呼びかけています。関西大学の学生さんもぜひ、ご応募ください。

11月には受賞発表と上映会、イベントを実施し、アジアからも学生を招待して、学生クリエイター同士の交流を図り、入賞者には次の作品製作の機会を提供するなどして、新鮮なコンテンツを生み出す若い才能をここから育てたいという希望を持っています。

イノベーションというと技術革新のことを指すと捉えられがちですが、私たちはもう少し広く社会を変えて行くことと捉えて、あえてナレッジイノベーションという言い方をしています。ナレッジイノベーションとは、多様なアイデアによって世の中を変えていくことです。ナレッジイノベーションという言葉は少し難しい感じがするかもしれませんが、言い換えれば、「OMOSIROI」ことをやっていくことだと私たちは考えました。

今世界に通用する日本語といえば「モットイナイ」とか「カワイイ」がありますが、それに続く日本発の言葉として「オモシロイ」を私たちは押していこう、大阪から「OMOSIROI」ことをやっていこうと言っています。大阪ならば「OMOROI」ではないのかという議論もあったのですが、「オモシロイ」は漢字で書くと、「面」に「白」と書きます。「面」は「目の前」を表し、「白」は「パッと明るくなることを表します。つまり、「オモシロイ」とは「パッと目の前が明るくなる」とか、「心が晴れ晴れする」ことです。ナレッジキャピタルに来られたら、研究者でも、科学者でも、技術者でも、一般消費者でもパッと明るくなって、ヒントや気づき、ひらめきがもらえる場所になればいいなと思っています。

そして、ナレッジキャピタルからスターを生み出したい。スターは人でも、製品やサービス、企業であってもいい。ここからスターを生み出し、世界に「OMOSIROI」を発信していきたいと考えています。